

【表現学関連分野の研究動向】

方言研究

小林 隆

今回から、研究動向の紹介として、本誌に「方言研究」のコーナーが設けられることになった。これまで、方言研究の世界では表現学的な研究が試みられてきたが、方言を対象とした研究はどうしても構造的な視点が強く、表現学的な視点からの研究は十分ではなかった。しかし、近年、方言研究の世界でも、いろいろな意味で「表現」に関わる研究が増えてきた。言語行動や談話、そして、オノマトペや感動詞といった運用の自由度が高い分野を扱う中で、「どう表現するか」ということに関心が集まってきたことが背景にある。日本語には数々の方言が存在する。「どう表現するか」も地域によってさまざまであることだろう。表現学は方言の世界に分け入ることで、研究のための新たな沃野を手に入れることができるはずである。

そのような意味で、表現学的な方言研究は今後に期待される部分が大きいが、今期はそうした期待に応える重要な本が出た。半沢幹一『方言のレトリック』(ひつじ書房)である。第I部「方言比喩語」では、全国的な比喩語の様相が概観されると同時に、北東北方言に絞った論述もなされる。単に記述に終わることがなく、方言語彙としての比喩語の位置づけや、位相差、成立要因にも考察が及ぶ。第II部「方言オノマトペ」でも、音声言語を基盤とした方言オノマトペの言語的な特性を検討し、方言学におけるオノマトペ研究の意義を問い直している点が注目される。

方言のオノマトペ研究という点では、川崎めぐみ「東北方言におけるオノマトペの対人評価的な使用について」(『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』34-2)も注目される。オノマトペというと、どうしても構造的な見方が優先されがちだが、この論はその評価性を含んだ使われ方に関心を寄せたもので、まさに表現学的な研究と言えるものである。東北方言では、直接相手に評価を伝える際に、オノマトペ要素「-ラ」が利用されたり、ABCB型系統の語形が使用されたりするといった知見は興味深い。

言語行動の分野では、加順咲帆「「受け止め表明」における言語行動の志向とその地域差—話者の言語感覚による東西の比較—」(『東北文化研究室紀要』64)が目にとまった。「受け止め表明」というのは、いわゆる「応答表現」の範疇を少し拡大した概念だが、その運用において、大阪話者は積極的であり、気仙沼話者は消極的であると言う。片方の地域の会話をもう一方の地域の話者に聞かせて反応を探るなど、方法論の開拓に意を注ぐ点でもユニークな論考になっている。

表現の歴史という観点から見たときにおもしろかったのが、澤村美幸『方言と日本のこころ』(NHK出版)である。方言意識の歴史をたどりながら、現代において方言が対人的な機能を強めたり、社会的な注目を集める役割を担ったりしていることを述べており、今後、この分野の研究に表現学的な視点が欠かせないことを示唆している。

最後に、「表現学」の多様さと私の見落としのために、重要な研究に触れずにしまっていることを恐れる。関係のみなさまのご寛容を願うばかりである。(東北大学名誉教授)